

巻頭言

## センター主催の研修を終えて

石井敦 (准教授)

先日、弊センター主催の初めての試みとして、宮城第一高校・国際探究科の生徒の皆さんを迎えて、研修が実施された。研修内容は、5名一組でそれぞれの研究室を訪ね、研究現場のライブ感を体感しつつ、双方向コミュニケーションによる学びを得る、というものであった。わたしは広報情報委員長として、同高校の皆さんをお迎えしたのだが、自分が高校生だったころを思い出し、懐かしい気持ちでいっぱいになった。一方で、高校在学中、大学との接点が皆無だったのは問題だったのだと改めて思った次第である。

そうした気持ちを抱いて研修にのぞんだのだが、わたしを選んだテーマはニホンウナギの資源管理である。このウナギは東北アジア地域において身近な食材でありながら、グローバルに取り引きされていると同時に、密輸や乱獲、生息地の減少などのリスクにさらされ、絶滅危惧種に指定されている。まさに、家庭の食卓、地域とグローバル化との関わり、共有資源を巡る環境問題、国際協力による共同管理、といった現代の複雑な問題を考えるのにとってつけのテーマといえよう。話題としては、ニホンウナギが安く大量にスーパーで売られているが絶滅危惧種に指定されていること（なぜそうしたことが起こるのか?）、そのための資源管理がなかなか進んでいないこと、そして中央大学を中心としたグループの研究（「放流ウナギは天然ウナギに勝てるのか?～養殖場の飼育を通じて、ウナギの種内競争の能力は低下する～」2022年07月05日：<https://www.chuo-u.ac.jp/aboutus/communication/press/2022/07/61303/>）を引きながら、いかにもニホンウナギの保全に寄与しそうなウナギの放



流も、実際は寄与しない可能性があることなどを取り上げた。その反応として、ウナギが絶滅危惧種であることが明確に伝わり、問題意識を持っていただくことができたのは、私としてはよかった。しかし一方で、全体としてあまりポジティブなメッセージにはならなかったので、深刻な問題を共有することの難しさを再認識した。

研修のあとに行われたアンケートでは、圧倒的にポジティブな反応が多かった。初の試みであったが、総じて好意的な評価を得たといえよう。これは弊センターの研究発信力が高いのと同時に、高校教育における地域研究のポテンシャルを示していると考えられるのではないだろうか。そしてより視点を広げれば、高校と大学との望ましい連携についても考えていかなければならない。

改めて、研修でお世話になった宮城第一高校の先生方、生徒の皆さん、弊センターでご協力いただいた教員、事務室の皆さまに、広報情報委員長として厚く御礼申し上げます。



### contents

- |                       |           |                |
|-----------------------|-----------|----------------|
| 1 巻頭言                 | 5 新任ごあいさつ | 8 国の消滅と誕生そして再生 |
| 2 「戦争が終わったら……！」       | 7 著書・論文紹介 |                |
| 3 最近の研究会・シンポジウム、展示会ほか |           |                |

## 「戦争が終わったら……！」

磯貝真澄

学術交流分野／客員研究員  
(千葉大学大学院 人文科学研究院 / 文学部 准教授)



「戦争が終わったら、カザンに来てね！」——10月中旬に東京で行われた学会で久しぶりに再会したロシアの、ただしタタール人の歴史研究者は、別れ際にそう言った。私はロシアのムスリム、民族的にはとくにタタール人、バシキール人の社会の近現代史を研究しており、カザンは彼らが集住するヴォルガ川中流域の中核的な都市である。2018年にロシアでサッカーのFIFAワールドカップが開催された時、日本代表がベースキャンプ地にした街であり、そこに日本のマスメディアも滞在してテレビ中継したため、ご記憶の方がおられるかもしれない。人口約130万を擁する。その街にあるカザン連邦大学に、私は2003～2005年の2年間留学していた。当時は「カザン国立大学」と呼ばれていた。1804年に帝国大学の一つとして創設された古い大学であり、学生だったレーニンが革命運動のために逮捕され、退学処分になったことでも知られる。「戦争が終わったら……」と言った研究者は、カザン大学の教授である。

ロシアがウクライナに対して行っている侵略戦争に関連してしばしば、なぜロシア国民はこれほど長期間、プーチン政権を支持してきたのか、という問いが出されている。それに対する多くの専門家の回答の一つは、次のようなものである：ソヴィエト連邦解体後、1990年代から2000年代初頭までのロシア国民の暮らしはかなり酷いものだったが、それを劇的に改善したのがプーチン大統領であると、彼らは考えている。——実際には、これもまた多くの専門家が指摘するように、ロシア経済改善の最大の要因は資源価格の上昇であり、プーチン政権の施策にはない。しかし、ロシアには私の友人・知人を含め、プーチン政権が国民の生活レベルを向上させ、安定させたと考える人は多い。プーチンはモスクワよりも地方で高い支持率を誇る。そこでここでは、2000年代初頭のロシアの地方都市——カザン——の暮らしについて、

少し書いてみたい。

私の20年来の友人夫妻の夫（1970年代半ば生まれ）は、今から4～5年前、次のように述べた。「僕らの10～20代の頃の生活は、最低だった。女はまだマシだったかもしれない。男にとっては本当に辛かった。同世代の不良が皆、本物のヤクザになってしまい、僕らは日が暮れてから通りを歩けなかった。あいつらに呼び止められると、小遣いを取られるだけでは済まない。ポコポコに殴られるんだ、気晴らしに。だから、帰宅が日没後になる日はビクビクしていた。」

つまり、都市社会で金銭的貧しさが続くと人びとの心は荒れ果て、暴力が日常になるのである。私自身の経験から言えば、私は2年間で少なくとも5回は、10～20代と思われる若者らが通りで、中高年と思しき男性をガンガン蹴っているのを見たことがある。若者らはたいい酒瓶を片手に、ラッパ飲みしながら人を蹴っている——おそらく、殴り倒した後である。蹴られている方が泥酔している風なのも、見たことがある。そうした通りでは、彼らの反対側を、人びとが見て見ぬふりで行きかう。誰も通報する様子はない。私も通り過ぎる、それが自衛である。

銀行、ホテル、スーパーマーケットといった、金銭や比較的高額の商品を扱う施設の出入口には、必ず警備員が常駐していた。友人に理由を尋ねると、1990年代に強盗があまりにも多かったためとのことだった。そうした警備員には、普通の市民、といった雰囲気の人もいたが、眼光の鋭い人も多かった。私は2回ほど、スーパーの出入口で警備員が万引きの疑いのある人を捕まえるのを見たことがある。商品の万引き防止タグが出入口で反応して警報音が鳴るやいなや、警備員はその人物の手を掴み、後ろ手に関節を固めて捕らえ

ていた。私の目には訓練を受けた治安要員の技に見えたが、ともかく、そうした警備員の横を通って食料品を買う暮らしである。そういえば、あの警備員らはどこに行ったのだろうか。さておき、食料品はスーパーでなければ市場で買うのだが、市場にはスロットマシンが何台も並ぶ場所があり、それにひっきりなしに硬貨を叩き込んでいる男がたたくさんいた。彼らは通りで人を蹴るような若者らと同じ雰囲気を持っていたが、どこから金銭を手に入れていたのだろうか。

大学での経験についても触れておきたい。食料品を買う話とのつながりで、食事の事情である。学生の中には時間割を組む時に、1時限目から14時頃まで授業を詰め込み、昼食をとらずに帰宅する人が少なくなかった。昼食代がないためである。学食では教授職にあると思われる年輩の男性が、キャベツのスープと黒パン一切れ、または肉団子一つにマッシュポテトと黒パン一切れのみを昼食をとっていたりした。実はその頃の私は、ロシアでは昼食を簡単に済ませるのが文化なのだと思っていた。2000年代後半、経済の改善が地方まで及んだ後になって学食に立ち寄ると、皆が肉の入ったスープと十分な大きさの肉料理を同時に食べるようになっていた。そこで初めて私は、自分が周りの人びとのことを理解していなかったと気づいたのである。

こうした経験は他にもあるが、ともかく、地方に住み、「酷い暮らし」を15年も続けた国民には、プーチンが「人間としてあたりまえの日常生活」を実現してくれた政治家に映る。上述の20年来の友人夫妻も、少なくとも今回の戦争の前まで、プーチン政権を支持してきた。私は、一方でロシアの政治状況について、たとえば国営テレビ放送のニュース映像に疑いを持ったり、言論の自由が制限されていく過程を観察したりしながら、他方で友人には、強いことを何も言えずにきてしまった。

「戦争が終わったら……！」と言うカザン大学の教授に、私は「戦争が終わったら、必ずカザンに行きます！」と答えた。ロシアの人びとに、そして私たちに、選択肢はあったのだろうか。

いそがいますみ 鳥取県出身。博士（学術）。東北大学東北アジア研究センター（ロシア・シベリア研究分野）助教を経て現職。専門は、中央ユーラシア、ロシア・ムスリム地域の近現代史。共編著に『帝国ロシアとムスリムの法』（昭和堂、2022年）。

研究会

## 歴史資料学研究会第1回～第6回例会



野本 禎司

(上廣歴史資料学研究部門/助教)

会期 4月11日、5月9日、6月20日、7月11日、9月12日、10月3日

会場 オンライン開催

上 廣歴史資料学研究部門(以下、部門)では、2022年度より「歴史資料学研究会」を毎月1回のペースで開催している。本研究会は、2021年6月から感染症対策に留意しオンライン形式で実施していた「上廣歴史資料学研究部門研究報告会」(本ニューズレター93号、荒武賢一朗教授執筆参照)を継承、発展したものである。東北地方の歴史資料を中心に扱いつつも、東北アジア地域の歴史資料へと対象を拡大し、オンラインの特性を活かして東北アジアの歴史研究についてさまざまな人たちと議論できる研究交流の場として受け継いでいる。研究会告知についても引き続き東北アジア研究センター広報情報委員会、コラボレーションオフィスに協力をいただくことで広く周知し、歴史資料学に関心をもつより多くの人たちと議論を深めた上で、その構築を進めたいと企図している。

各回の開催日時は、月曜日18時から20時までとし、1例会につき報告者1名を基本として、できるだけ討論の時間を確保して開催している。オンラインでのクロストークは難しい面もあるが、自由に意見交換ができるような運営に努めている。2022年4月から開始し、8月は

休会として、10月までに6回の研究会をオンラインで実施した。その内容を列記すると、つぎの通りである。

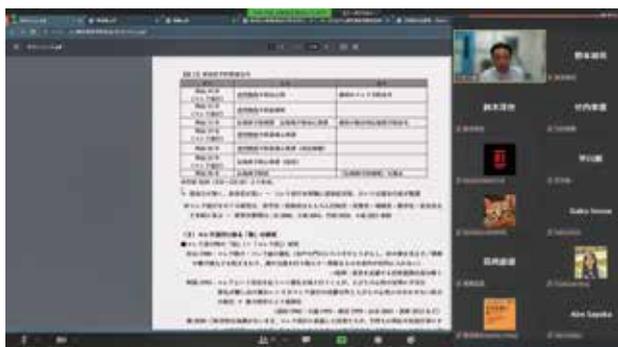
第1回例会(4月11日)＝黒滝香奈氏(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)「領支配錯綜地域における用水争論の特質—越前国十郷用水の嘉永期神明口一件を事例に—」、第2回例会(5月9日)＝荒武賢一朗氏(部門)「白石市渡辺家文書の紹介—明治初年を中心に—」、石澤夏巳氏(公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センター)「明治二年東北凶作をめぐる社会対応と人びと—奥州安積郡郡山を中心に—」、第3回例会(6月20日)＝程永超著『華夷変態の東アジア—近世日本・中国・朝鮮三国関係史の研究』書評会(評者:荒武賢一朗氏)、第4回例会(7月11日)＝竹原万雄氏(部門)「感染症流行後の「祭」と地域復興—明治10年代における宮城県のコレラ流行を事例として—」、第5回例会(9月12日)＝横山恭子氏(富山高等専門学校講師)「近世中期朝鮮通信使乗馬役と弘前藩津軽家—正徳・享保期の鞍皆具派遣を中心に—」、第6回例会(10月3日)＝山本英貴氏(帝京大学文学部准教授)「19世紀初頭における江戸幕府の政治構造—弘前藩津軽家



歴史資料学研究会ポスター第4回例会

の官位昇進運動を中心に—」。

報告者は、大学院生から各専門分野の最前線で研究成果を発表されている大学教員・学芸員など、若手研究者に積極的に依頼している。歴史資料にもとづく丁寧な研究分析から描き出される新たな歴史像を提示いただくことで、毎回活発な議論を展開できている。また、部門の主たる歴史資料保全活動地域(宮城・福島・山形)のみならず、これまでの報告会では越前国(福井)、弘前藩(青森)、中国、朝鮮など各地域の歴史資料の伝来、管理の特徴を意識した議論を重ねることで、歴史資料学の構築のために有意義な機会となっている。各地には未発見、未整理の歴史資料が膨大に残されており、これらの資料保全が進み、公開・活用されるようになれば、新たな歴史的事実が提供され、歴史解釈は変わっていくことになるだろう。歴史資料学研究会が、歴史資料保全の実践から描かれる新たな歴史像を議論し、その研究の展開、持続の場の一つとなるよう積み重ねていきたい。



歴史資料学研究会第4回例会のようす (Zoom画面)

シンポジウム

## 国際シンポジウム(9月27日~29日)と国際ワークショップ(9月30日、10月4日) Insights Into Human History in the Eurasian Stone Age: Recent Developments in Archaeology, Palaeoanthropology, and Genetics



佐野勝宏

(モンゴル・中央アジア研究分野/教授)

**会期** 国際シンポジウム(9月27日~29日)と  
国際ワークショップ(9月30日、10月4日)

**会場** 東北大学 知の館(仙台市)

2

2022年9月末から10月初頭に、東北大学の知の館で国際シンポジウム(9月27日-29日)と2つの国際ワークショップ(9月30日、10月4日)を開催した。両イベントは、当初2022年5月に開催する予定で、ニューズレター91号でもその旨を紹介したが、COVID-19の感染拡大の影響で延期した。東北大学は、人類社会が直面する共通課題の解決に貢献する知の共同体として「知のフォーラム(Tohoku Forum for Creativity: TFC)」を創設し、様々なプログラムを支援している。本イベントは、知のフォーラムが支援するThematic Program 2022に採択され実現した。Thematic Programは、世界をリードする研究者を招待して国際シンポジウムやワークショップを開催し、重点的な議論から当該分野の研究を深め発展させると共に、日本国内の若手研究者の育成にも役立てる事を目的としている。センター教員が運営するThematic Programは、高倉浩樹教授が2018年度に運営した「Geologic Stabilization and Human Adaptations in Northeast Asia」に次いで2件目である。

私が申請し採択されたテーマは、「Insights into Human History in the Eurasian Stone Age: Recent Developments in Archaeology, Palaeoanthropology, and Genetics」で、ユーラシア大陸の石器時代の人類史に関する、考古学、古人類学、遺伝学の最新の成果を学際的に議論することを目的としている。国際シンポジウムは、4つのセッションで構成され、東北アジアにおける旧人の拡散・交雑・絶滅、ホモ・サピエンスの誕生と西・東ユーラシアへの拡散、日本列島へのホモ・サピエンスの拡散と周辺地域との文化的・遺

伝的交流の歴史が議論された。プログラムの詳細は、TFCのウェブサイトを確認できる(<https://www.tfc.tohoku.ac.jp/program/2164.html>)。

今回のThematic Programでは、タイトルにある通り、考古学、古人類学、遺伝学の研究者が発表したが、こちらが期待していた以上に、それぞれの分野の成果が有機的に絡み合う議論が展開された。シンポジウム中は、活発な質疑応答が展開され、休憩時間や懇親会の席で交わされた議論は、次の共同研究が生まれつつあることを感じさせた。参加してくれた多くの研究者が、テーマを限定し、3つの分野の研究者の発表を聞き、密に議論することができた点を喜び、また大いに楽しんでくれた。私自身、一週間に及んだこのイベントを実に楽しむことができた。

今回のイベントは、対面での開催にこだわった。中国からの発表者が日本には来られず、また諸事情で日本には来られない発表者もいたため、オンラインでの参加も可能なハイブリッド型式で開催したが、完全オンラインでは開催しないことをオーガナイザー間で決めていた。コロナ禍の水際対策、ロシアによるウクライナ侵攻、燃料費の高騰、急激な円安が起こる中、対面での国際シンポジウムとワークショップを準備する事は、ここでは書き切れない大変さがあった。しかし、質疑応答後の休憩時間に議論を続け、懇親会でざっくばらんに意見を交わすこと

は、対面でなければ実現しなかった。今回、改めて学会を対面で開催する意義を感じた。

折しも、このイベント期間中に、古代DNA研究者のSvante Pääbo氏がノーベル生理学・医学賞を受賞した(彼は、当初基調講演を快諾してくれていたが、開催を5月から9月末に延期した事で来日は実現しなかった)。人類進化研究が、人類社会が直面する共通課題を解決する上で、欠かすことのできない重要なテーマであることが認められたわけであり、今後この分野が果たす役割は一層期待されることであろう。そして、今回のThematic Programは、旧人デニソワ人やネアンデルタール人とホモ・サピエンスの複雑な歴史が展開された東北アジアは、人類進化研究において極めて重要なフィールドであることを再認識させてくれた。

最後に、本Thematic Programの運営には、千葉センター長を始め、東北アジア研究センターの事務の方々に多大なるご支援をいただいた。この場を借りて、心よりお礼申し上げます。



国際シンポジウム対面参加者の集合写真

# 上廣歴史資料学研究部門「白石商人の足跡：渡辺家文書調査から」



荒武賢一朗

(上廣歴史資料学研究部門／教授)

会期 9月1日～29日

会場 仙台市営地下鉄東西線国際センター駅(仙台市)

上 廣歴史資料学研究部門では、白石市教育委員会と共同で歴史資料「渡辺家文書」の調査を進めている。渡辺家は江戸時代から現在の宮城県白石市で商工業を営み、地域社会においても中心的な存在であった。これまでの作業で約 35,000 点におよぶ歴史資料を確認している。今回の展示では、江戸時代の白石町や渡辺家歴代当主の足跡

を追い、1839 年（天保 10 年）に伊勢神宮へ参詣をした 7 代目渡辺喜伴の「道中記（旅日記）」を紹介した。また、渡辺家の手がけた和紙取引や醤油生産、そして質屋などの記録をもとに解説することができた。なお、展示パンフレット「別冊史の杜 5 号」は、上廣歴史資料学研究部門ホームページ <https://uehiro-tohoku.net/> でダウンロード可能である。



展示会場（国際センター駅構内）

## 新任ごあいさつ

NEW FACULTY & POSTDOCS

### #1

## 緑の仙台、美しい東北、日本海海戦の記憶



KOWNER Rotem

客員教授／

ロシア・シベリア研究分野  
(2022年8月1日～2022年9月30日)

コーネル・ロテム ▶ イスラエル生まれ。博士  
(心理学) (筑波大学)。ハイファ大学 (イスラエル) アジア学科教授。

2022 年夏、東北アジア研究センターに 2 ヶ月滞在しました。今までで一番興味深い夏の一つでした。センターの研究者はみな有能で、東北大学とその図書館は素晴らしく、仙台は美しく活気に満ちた大都市です。私は今後も、広瀬川沿いのサイクリング、東北地方の美しさ、そして 2011 年の津波から 11 年経った、荒廃した漁村と海岸沿いの放棄された小さな町の光景を思い出すでしょう。近年、主な関心事は 1905 年の日本海海戦とその影響です。この海戦は、交戦国である日本とロシアだけでなく、20 世紀初頭の列強全てに大きな影響を与えたと思います。当初のセンター滞在予定がコロナ禍で延期され、その間に、Tsushima という私の著書がオックスフォード大学出版局から出版されました。それでも、このロシアの大失敗が太平洋、特にウラジオストク周辺での海軍政策に与えた影響をさらに調べたいと思いました。センターでの滞在は、この研究の完遂に役立ちます。滞在を快適でスムーズにしてくれた方々に感謝いたします。

## 周縁文化の独自性と文化変容の理論研究

東アジア地域における哲学、政治、社会等の比較研究を学際的・総合的に行う、及びその史的展開の解明でいます。具体的には、①朱子学（宋明理学）の用語も緩用しながら漢文でイスラームの教理・哲学を説く著述を著した「回儒」とよばれる中国ムスリム（回民／回族）知識人の思想体系（回儒学）、及びウイグルムスリム思想体系の解明、②中国の思想・哲学（儒学・回儒学等）と江戸時代に独自の発展を遂げた日本の儒学との比較研究、③東アジア地域における近代化の過程で中央アジアテュルク系ムスリム及び中国ムスリムの存在が日本・中国・欧米でどのように「再発見」され、中央アジア・中国イスラーム研究がいかにして創始・発展してきたのかという学術史の分野にも向かっています。現在、着実かつスムーズに研究成果を積み重ねており、かつそれらをウイグル語・漢語・日本語・英語・ウズベク語・トルコ語の多言語で、国際的な学術界へ広く発信しています。

### #2



阿里木 托和提  
ALIMU TUOHETI

特任助教／マイノリティの権利とメディア研究連携ユニット  
(2022年8月1日～2022年1月31日)

アリム・トヘティ ▶ 人間文化研究機構から出向（人間文化研究機構 総合人間文化研究推進センター研究員）

# #3



王向華  
Heung Wah WONG

特任教授／学術交流分野  
(2022年10月1日～2022年12月26日)

オウ・コウカ ▶ 香港生まれ。Ph.D. (オックスフォード大学)。香港大学教授。

## 学術交流分野・特任教授 新任のご挨拶

このほど、客員教授として着任することができ、大変光栄に存じます。私はオックスフォード大学で文化人類学を学んだ後、香港大学の日本研究学科に所属してきました。研究テーマは3つあり、第1は文化人類学の中の新領域である経営人類学です。香港の日系スーパー・ヤオハンや、香港の一中国系家族経営企業に関する英語ならびに日本語の著書があります。第2のテーマは、日本の大衆文化のグローバル化で、日本のAVに関する英文共著三部作があります。さらに第3のテーマは中国人の親族関係で、現在新著を執筆中です。

2012年には香港大学文学部に「Global Creative Industries」コースを立ち上げ、高い人気を得ています。私自身は中国の文化クラスター政策に関する本と、中国における「鉄腕アトム」の受容・普及に関する本を現在準備中です。

今回の在任中に、これら計画中の著書を完成させることを目指しており、センターの皆様から多くの助言・助力をたまりたく思っております。

## 東アジアへの学際的なアプローチをめざして

2022年10月1日付で東北アジア研究センターに着任したパホモフ・オレグと申します。私は2003年にロシア極東連邦大学・国際関係学部から国際関係の学士号で卒業しました。卒業後来日しました。2007年に京都大学にて社会人類学修士号を取得し、2011年に博士号を取得しました。直近の研究対象は、主に北極圏における国際関係・協力と東北アジア政治文化です。現在の研究プロジェクトの主題は、ロシア極東と東北アジア関係の歴史と現状です。ロシア極東地域のアイデンティティが、北東アジアとの複雑な関係とロシア国家政策によって、どのように形成したかに焦点を当てます。さらに、シベリアと極東開発がロシア国家の発展に与えた影響についても考察したいと思います。ロシア語、日本語、中国語、韓国語の史料を使用して歴史と現状を分析を行っています。

東北アジア研究センターで皆様と働くことができ誠に光栄です。センターの発展のために貢献ができればと考えています。

# #4



PAKHOMOV Oleg

助教／ロシア・シベリア研究分野  
(2022年10月1日～2025年9月30日)

パホモフ・オレグ ▶ 1981年ロシア・ウラジオストク生まれ。趣味はキックボクシング。

# #5



石井花織

専門研究員／  
ロシア・シベリア研究分野  
(2022年10月1日～2023年3月31日)

いしい・かおり ▶ 2022年9月東北大学環境科学研究科博士後期課程修了。専門は文化人類学。

## アラスカの環境変化と社会の応答、人-廃棄物関係

私は北極域の自然・社会環境の変化とその汚染としての現れ、それに対する社会の応答について関心を持っています。これまでアラスカ遠隔地の廃棄物問題について研究を進めてきました。それらの村では、近年廃棄物の質の変化や気候変動に伴い、慣習的処理方法（簡易的焼却やオープンランピング）が問題視されています。現代の主流な処理方法やリサイクル観念は主に先進国の都市社会で発展してきたのに対し、地理的・文化的にさまざまな条件が異なる調査地では、既存の制度がカバーしきれない状況が存在します。そのため地方政府に加え NGO や企業、先住民組織などの外部主体が対策に関与しています。協働はどのように可能となるのか。外部主体の問題認識と、村の先住民の認識や在来の循環観念との間に溝はないのか。対策から生じる影響にはどのようなものがあるのか。今年度はフィールドワークも行いながら引き続きこのテーマに取り組みます。どうぞよろしくお願いいたします。

# #6



## 佐野 勲

客員研究支援者／  
地域生態系研究分野  
(2022年10月1日～2024年7月31日)

さの・いさお ▶ 東北大学大学院博士課程修了。博士（生命科学）。本属は中外製薬株式会社。

## 淡水二枚貝類を例に進化の謎を解き明かす

この度、客員研究支援者に着任しました佐野勲と申します。

2021年までは、博士学生として千葉聡先生の研究室にお世話になり、淡水二枚貝類の進化の内容で学位を取得しました。学位取得後は、中外製薬株式会社に入社し、データサイエンティストとして創薬研究に従事しています。就職後も、進化の研究を継続し、国際誌への論文発表や学会発表、書籍の出版などに取り組んできました。

淡水二枚貝類は、種多様性が高く、進化の研究のための絶好の材料です。そこで、淡水二枚貝類を材料に用いて生物進化のメカニズムや多様化のプロセスを解明したいと思っています。また、就職後に培ったデータサイエンスの技術も活用して、人の目では分類が難しい淡水二枚貝類の分類モデルの構築を目指します。正確な種同定技術を確立し、絶滅に瀕している淡水二枚貝類の保全にも貢献したいと思っています。どうぞよろしくお願いたします。



## RECENT PUBLICATIONS

### 祖先の威光のもとで—宗族研究の総括と展望 (東北アジア研究センター叢書 71号)

瀬川昌久 著 東北大学東北アジア研究センター 2022年9月10日刊

text: 瀬川昌久



本書は、著者が約40年間の研究者生活の中で主要な研究テーマの1つとしてきた中国の父系親族組織・宗族(そうぞく)について、その研究成果を集大成したものである。宗族は、中国東南部の農村を中心に、明清以降顕著に発達してきたことで知られるが、20世紀半ばの急進的社会主义改革により姿を消した後も、1990年代以降は再び農村部を中心に復活している。本書は、これまでの文化人類学の研究史において宗族がどのように研究されてきたかを総括し

た上で、著者が1980年代に香港新界で行った長期滞在型のフィールドワークに基づく宗族の土地所有や儀礼活動の分析と、2000年以降に中国本土で行った宗族復活に関する調査結果の概要を紹介している。そして、それらの具体事例の分析結果を組み合わせることにより、現代社会の中で宗族が根強く存在し続ける理由と、それを文化人類学的な視点から研究することの意義を論じている。

### 文化遺産と防災のレッスン—レジリエントな観光のために

山下晋司・狩野朋子 編、高倉浩樹 共著 新曜社 2022年9月刊

text: 高倉浩樹



本書は、「文化遺産をいかに護るか」ではなく、「文化遺産でいかに地域を護るか」を考え、災害研究・観光研究・文化遺産研究などの学部教育における教科書・副読本を目指して編まれたものである。東日本大震災以降に着目されたのは、祭礼や儀礼などの地域の行事が震災復興に寄与しているという事実だった。文化遺産のもつ「回復力」に着目した視座は、国内外の研究者によって共有され、様々な研究が進んでいる。本書はその成果を踏まえ、日本とアジア諸

国の事例が簡潔に紹介されている点に特徴がある。特に外国での災害観光の紹介は、日本では知られておらず興味深い。さらに文化遺産の保全や所有主体をめぐるユネスコの議論なども解説されている。文化人類学、地理学、都市計画学などの学際的な内容であるが、各章ごとの要旨があり、また練習問題もついており、編者二人によってしっかりとまとめられた構成となっている。

## 国の消滅と誕生そして再生

佐藤源之

(資源環境科学研究分野/教授)



小学生の時に使った古い地図帳がある。よく授業前に友達と地名を捜す遊びをした。見つけにくい地名を出題するため、どのページもよく読んだ。ソビエト連邦、ドイツ民主共和国（東ドイツ）、ユーゴスラビア社会主義連邦共和国はすでに消滅した。

ユーゴスラビア社会主義連邦共和国はチトーの率いる「独自の社会主義国家」をめざしていると習った。1991年の連邦共和国崩壊後にボスニア紛争が激しくなった頃、仙台の国際会議への参加予定者から「自分が住むサラエボでは外で銃声が聞こえる」という生々しい電子メールが届いた。現在私はサラエボ周辺で地雷除去活動を行っている。分離独立したボスニア・ヘルツェゴビナでは民族問題が解決していないことを、ウクライナ紛争開始後一部地域だけで急に増えたロシア国旗が目当たりにする。

カンボジア王国はシアヌーク殿下の平和な国と教えられた。国内の混乱と地雷を残したクメール・ルージュ幹部の裁判はようやく終わろうとしているが、彼らが最後まで立てこもった山岳地帯で現在私は地雷除去活動を行っている。一緒に仕事をするカンボジア地雷除去隊員は二十歳前にこの鬱蒼とした密林を銃撃を恐れながら走りまわっていたと事も無げに話す。

ロシアに東北大学の連絡事務所を立ち上げるため、1997年から数年間ノボシビルスクの学園都市アカデムゴロドクを頻りに訪ねた。当時のロシアはソビエト時代と、さほど変わってなかったのだと思う。クレジットカー

ドが使えず現金を持って家具屋でデスクを買いオフィスを整備するような仕事はロシアの生活に触れながらわくわくする作業でもあった。軍事研究に重きをおいていたソ連科学アカデミーの研究者を日本との交流を通じて支援することが東北アジア研究センター設立の目的の一つであった。少なくない研究者が日本や欧米に拠点を移したが、懸念したような混乱は起きなかったように見える。連絡事務所も当初の目的から一般的な日ロ交流に軸足を移した。トラブルも経験したが研究者との交流を通じてロシアに知り合いがたくさんでき、留学生やボスドクも積極的に受け入れた。

2022年春になり、ロシアからの連絡は忽然と途絶えた。インターネット情報が管理されている状況で電子メールを送ることに躊躇している。中国政府の統治が強くなってきた時期に香港の友人に最近どうしているかとメールをしたら、コロナの事なら大丈夫だと気の抜けた返事が来た。

1989年3月まで私が留学していたハノーファーは西ドイツ（ドイツ連邦共和国）から鉄道やアウトバーンでベルリンに向かう入口に位置している。統一前に東ベルリンを歩いた。西ドイツマルクを東ドイツマルクの安くさいアルミ貨幣に強制交換させられ、持ち帰ることは許されないが買う商品は店に無い。旅行者としては緊張の連続であり、町の警察官は社会主義の管理の象徴に見えた。テレビ電波は国境を越え、西側の情報はいくらかでも入るはずなのに東ドイツの人は何を思っていた

のか。日本に戻ってわずか半年でベルリンの壁が崩壊し、東ドイツは消滅しドイツは一つの国になった。1989年11月9日の晩に分断で蓄積されたエネルギーが爆発したように見えた。

ウクライナの状況は2022年11月現在予断を許さない。第2の都市ハルキウに住む知人から「ミサイルの音が聞こえる、電気が1日に数時間しか来ない、水道も頻りに停まる」とメールが来た。ロシア軍が地雷を残して退散していく。人道的地雷除去作業は20-30年で一定の成果が得られ、地雷の直接被害は激減する。私はアフガニスタンの地雷除去を目的に2002年に地雷検知用レーダー装置の開発を開始した。開発した装置はユーゴスラビアから独立したクロアチアで2006年からの長期現地試験を経て、2018年からカンボジア、2021年からボスニア・ヘルツェゴビナで本格的な地雷除去活動を行っている。世界的に地雷問題は終息に向かうと思われた頃にISのテロ活動、そしてウクライナ紛争。新しい技術の導入による地雷除去活動の推進が再び求められている。現在私たちは外務省の支援を受けウクライナへ私たちが開発した地雷検知装置を導入する準備を進めており、2023年1月に隊員の訓練を開始する。

数学の巧みなロシア人研究者が今後も活躍するのは間違いない。彼らが国際社会に一刻も早く復帰できる情勢に戻ることを祈りつつ、東北アジア研究センター設立当初とやや似た状況でセンターの役割を再度見直す時が来ると思っている。

### 編集後記

ウクライナ戦争は未だ全く出口が見えず、同国の人々は電気もガスもなしで酷暑を迎えた。日露関係は1956年の日ソ国交回復後最悪の状態となったまま。我が国の若手のロシア研究者の今後の心配である。そして、この戦争以前からソ連時代以下の水準に下がってしまっていた日本人の対露認識がこれ以上低下することが何よりも恐ろしい。(柳田賢二)



東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究所型組織です。

東北大学東北アジア研究センター  
ニューズレター 第95号

2022年12月26日発行

編集：東北アジア研究センター広報情報委員会  
発行：東北大学東北アジア研究センター  
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41  
TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010

Facebook  
をチェック!

